

戦後沖縄における「スクラップ・ブーム」とその影響

——人的被害のひろがりに着目して——

加藤政洋・前田一馬・河角直美・常本亮太

1 研究の背景と目的

陸上・海上を問わずに展開された沖縄戦は、「鉄の暴風」にたとえられる。戦後、陸地と海域には大小さまざまなおびただしいスクラップ（屑鉄・非鉄屑）が残された。

当初スクラップは米軍（米国民政府）の財産として拾集を禁じられていたものの、一九五三年八月から沖縄経済の援助策として琉球政府に権限が移譲され、納付金制度にもとづく民間業者の輸出がはじまる。すると、屑鉄・非鉄屑を拾集（集荷）・輸出する業者が簇生した。そこに日本本土の神武景気（一九五四年二月～一九五七年六月）が重なり、鉄鋼の需要が高まったことから、散乱する屑鉄・非鉄屑が脚光を浴びて、「スクラップ・ブーム」と称される社会現象を引き起こす。「スクラップ・ブーム」という語句の初出を確認するにはいたっていないものの、「ブーム boom」とは「にわか景気」を意味する。無尽蔵でない以上、陸に海に散在するスクラップを取り尽くしてしまえば枯渇することは明らかで、一九五八年前後にブームは終焉する。問題は、このブームのさなか、連日紙上に関連する記事が掲載されるほどに、事件・事故が多発したことだ。なかでも世間の耳目を集めたのは、たびかさなる爆発死亡事故であった。不発弾の火薬を抜き取ることから、処理を誤ると爆発し、大惨事となったのである。

「スクラップ・ブーム」に関しては、ブームが去ってから繰り返し地元紙で回顧されたほか、二〇〇〇年前後からは戦後の沖縄史を語るうえで必ずといってよいほどに言及される事項となっている。「ブーム」と称してはいないものの、戦後沖縄の産業構造をふまえてスクラップ経済の特色をいち早く簡潔に整理して伝えたのは、公職を追放されたばかりの瀬長亀次郎にほかならない¹⁾。彼は「いのちがけで得られた水中、土中の鉄屑が全輸出額の六割以上を占めていること」、それが一九五八年から一九五九年にかけて激減したことをとらえて、「沖縄の輸出産業の脆弱性」を指摘したのだった。松田賀孝もまた、統計資料から一九五三年以降の輸出総額に占めるスクラップの割合を算出するなどして、「スクラップ・ブームの消滅」を跡づけている²⁾。

事典類においても、「スクラップ（・）ブーム」に関連する項目が立てられるもの³⁾、当然ながら紙幅は限られ、ブームの全体が俯瞰されたとはいえない⁴⁾。この点において、川平成雄『沖縄占領下を生きた軍用地・通貨・毒ガス』では、「スクラップと沖縄経済」ならびに「生活の糧と事故の多発」というふたつの項目にわけてブームの実相が簡潔に論じられており、ブーム終焉から五〇年以上の歳月を経ながらも先駆的な研究成果として評価される⁴⁾。

本研究の目的は、戦後沖縄における「スクラップ・ブーム」の実態を、規制緩和にともなう拾集場所の空間的拡大、次いでブームの余波

ないし影響の諸相、そして諸相の一面をなす事故の状況と分布、さらにはスクラップ集積地域の変容を通じて明らかにすることであり、とくに本稿では最初の三つに焦点をしばって論ずる。川平が「事故の多発」に注目し、スクラップ拾いとその事故現場が「陸上から海上」へ移行したとする視点を引き継ぎつつ、事故の発生地地点の地図化を通じて、ブームの空間的側面を浮き彫りにしてみたい。

ブームそれ自体がわずか数年間の社会現象であるだけに、輸出額などの統計資料をのぞくと得られる資料は少ない。そこで、『琉球新報』・『沖縄タイムス』の両紙に掲載された関連記事を基礎資料として活用し、分析を進める。

2 スクラップ経済の成立と終焉

(一) 規制緩和とブームの到来

スクラップの回収がいつからはじまったのかはさだかでないものの、「E・G グリス、新生産業KK、モーラ（ス）」社の三社が米国防府と契約し屑鉄処理に乗り出し⁵たのは一九五一年のことである（『沖縄タイムス』一九五八年一月四日夕刊）。当初は戦勝国である米軍の財産として売却されていたものの、先にふれたとおり、一九五三年八月四日にスクラップの処理権が米国民政府から琉球政府へと移譲され、これによって「地上スクラップをすべての琉球住民が集荷並びに輸出をすること」が可能となった（『琉球新報』一九五三年八月五日）。ただし、海上スクラップ、非鉄金属、沖縄島以外のスクラップ、既存の許可業者（新生産業）の取り扱う「特殊地域（ホワイトビーチ、渡久地、楚辺、比謝川）」のスクラップ、そして軍施設から発生するスクラップに関しては、集荷することが認められていない。

このように制限は多いながらも、「五三年八月スクラップ収集が認可されてから五四年ははじめごろまではいわゆるスクラップブームを現出」する。当時の「輸出先は専ら日本となつてゐるため日本に於ける相場の変動は：〔略〕：琉球屑鉄業界の景気不景気を左右する」要因となり（『沖縄タイムス』一九五五年八月一六日⁶）、一九五三年から一九五八年までとおおまかに括られるブームのさなかにあっても、出荷量の変動は著しかった。

次いで一九五五年一月一日の米国民政府布令第一四二号において「琉球列島の領海内にある海上スクラップの収集」が認められる（『沖縄タイムス』一九五五年一月二二日）。「海上スクラップ」といっても、実際のところは「沈船および海底の破損物」であるのだが、この布令によって沈船などを発見した場合には、琉球政府は一二〇日間の期限をもって公示し、その間に所有権の訴えがなければ自由に処理できる⁶ところとなった。

さらに同年七月一日には、非鉄金属（葉莖や絶縁・被膜線など）、民政府契約会社（モーラス社）の取り扱うバクナー湾、そして軍施設ないし軍指定地域をのぞく、すべての「陸上スクラップの処理」が認められるにいたつた。これは「海上と陸上の中間に存在」する、つまり分布域のあいまいな海浜部のスクラップの取り扱いを認める規制緩和である（『沖縄タイムス』一九五五年七月五日夕刊）。

このような相次ぐ規制緩和と日本側の鉄鋼不足にともない、ブームのピークが到来する。

世はまさにスクラップ時代。クズ鉄を追う人々の眼は、街や村のいたるところで見受けられる。一斤40円、50円、高いので60円台もするのだから貧しい家庭にとっては最大の収入となる。だか

ら砲弾の火薬を抜きとるといった危い芸当も平気でやってのける。

戦争の落し子であるこのクズ鉄ブームは三年前から始まった。野に山に海に、いたるところに散在している目ぼしいスクラップは、殆んど取りつくされたが、こんどは地下に目をつけて軍の塵捨て場を約四丈も掘り下げたため、全く変形した中部の或る部落もあるし、家をこわして敷地を掘った業者もいる。海中に沈んだ米軍の遭難飛行機を分解して集めたスクラップ亡者もおれば、高圧線にとびついてそれを切り盗った無謀な犯罪も現われた。

子を背負った母親が生活に疲れた手でツルハシをにぎり大地を掘りあさっている図は、沖縄の貧困さを如実に物語っている縮図といえよう。砲弾の火薬抜き取りで一家が爆死した事件だつてある。

〔沖縄タイムス〕一九五六年二月九日夕刊

これは「スクラップ・ブーム」を写真特集した一九五六年二月の紙面から引用したものである。図1は撮影の時期・場所ともに不明なもの、スクラップを掘り起こす女性たちの姿が写る⁽⁷⁾。

この記事の見出しで重要なのは、スクラップ拾集の場が「地上から地下へ、そしてこんどは海中へ」と変遷したことにくわえて、「生活を助けるために子供たちまで発掘に当る」という児童労働の問題、さらには電線の窃盗といった犯罪行為、そしてなによりも砲弾の火薬抜き取りにともなう爆発事故を指摘したことであろう。

(二) 出荷額の推移

『沖縄年鑑 一九五九年度』などにもとづき⁽⁸⁾、戦後沖縄の二大輸出品目となったスクラップと砂糖の輸出額をまとめたのが表1である。

戦後沖縄における「スクラップ・ブーム」とその影響



図1 スクラップを拾集する女性たち (撮影年月日・場所不明 [沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵])

表1 スクラップと砂糖の輸出額（ドル）

年	輸出総額	スクラップ		砂糖	
		輸出額（%）		輸出額（%）	
1952	5,002,189	149,325	(3)	2,540,935	(51)
1953	4,599,158	1,145,708	(25)	1,642,279	(36)
1954	7,722,947	1,487,150	(19)	4,492,900	(58)
1955	13,436,793	4,891,877	(36)	6,970,067	(52)
1956	20,166,339	11,698,603	(58)	6,585,128	(33)
1957	14,953,442	6,250,260	(42)	6,355,940	(43)
1958	16,506,087	2,685,846	(16)	7,607,065	(46)
1959	21,156,252	4,313,463	(20)	8,319,658	(39)
1960	29,094,191	2,717,144	(9)	12,850,788	(44)

*%は総額に占める割合。

**スクラップは非鉄金属類を、砂糖は黒糖のほかに分蜜糖などを含む。

『琉球統計年鑑』などにより作成。

戦前にさかのぼって一九四〇年の輸出をみると、出荷額の六三・五%までもが砂糖で占められていた。さとうきび農業と製糖業への依存度が極度に高い。ところが、一九五〇年代なかばになると、スクラップの輸出量が増大し、一時的であるとはいえ額にして砂糖を逆転するほどの割合を示したのである。ピークとなった一九五六年には砂糖の約一・八倍の輸出額であった。

一九五二年当時は、米国民政府と契約した三社が沈船を処理して輸出していたに過ぎなかったが、一九五三年にスクラップ処理権が琉球政府へと移されるにともない、前年から約八倍に急増した。

○…もともとスクラップは「戦争犠牲」の見返り財産として、貧しい琉球にとつてはぜひ欲しいもので、その点政府もたびたび

軍とかけ合い、五三年八月やつと陸上だけのスクラップに限つてその収集処理権が琉球政府に与えられた。その時には、既に米軍との入札契約で日本を含む外国業者がそのほとんど八割までも持ち出し、残りいくばくもないといわれたほどであったが、それでもあれから今年までの二カ年に廿万トン四百五十二万ドル（五億四千二百万円）を地元業者の手で輸出し、五千万円という金が政府の台所に駆けこんだのであるから、まつたく「スクラップさまさま」。輸出番付では黒糖について第二位、揺がぬ大関の地位を占めている。（『沖縄タイムス』一九五五年七月四日）

処理権の移った一九五三年段階で、沈船を中心とする残存スクラップの約八割が軍指定の外国籍業者によって処理されたと見積もられていたことから、期待はあまり大きくなかったようだ。

ところが、一九五五年の出荷額は一九五三年の四・七倍にふくれあがり、翌一九五六年には前年比にして二一〇%を超える一千万ドルの大台に達する。表1に示されるように、一九五五年の「輸出番付では黒糖について第二位」であったものの、翌年には「琉球最大の輸出品としてドル収入面から琉球経済に大きなプラスとなり、また政府の財政収入にも貢献」した（『琉球新報』一九五七年六月一五日々刊）。当時の様子は、「琉球全体がスクラップ・ブームにわき学童は授業時間中も学校を抜け出してスクラップ集めに走ったほどだった」と二年後に回顧されている（『琉球新報』一九五八年七月一一日夕刊）。スクラップには、米軍からの払い下げ分もふくまれました。

民政府の発表によると五六会計年度における琉球人業者の在沖米軍から購入したスクラップは総高約二億三千六百四十万円（百九

十七万ドル)に達した。このうち陸軍関係が約一億一千九百七十一万五千元(九十九万七千六百二十五ドル)空軍関係が一億一千六百四十万円(九十七万ドル)以上になつてゐる。陸軍スクラップヤードから売却されたスクラップ品の約九九%、空軍は約九〇%がそれぞれ琉球業者に売却されている。

全体に占める割合は少ないにせよ、基地内や演習地から恒常的に廃棄される屑鉄をも処理していたことになる。軍当局は「軍の払下げ品は相当住民経済に利益をもたらしている」と誇示するのだが(『沖繩タイムス』一九五八年二月六日夕刊)、土地接収にともなう農業生産の困難を考えれば、これは統治者の驕り以外のなものでもない。

(三) ブームの終焉

ブームとしてのスクラップ経済が長続きすることはなかった。一九五七年の出荷額は前年の約五四%にまで落ち込む。「日本政府の金融引締めとアメリカからの大量仕入で価格は暴落、文字通りスクラップ・ブームも一場の夢」となった(『沖繩タイムス』一九五八年四月一日夕刊)。ピークに達した一九五五年から一九五六年にかけてさえ、「屑鉄ブームに終止符?」、「屑鉄輸出に先行き不安」、「屑ものブームに暗影」と報じられるなど(『沖繩タイムス』一九五五年五月三〇日、一月四日、一九五六年二月一〇日)、つねに本土側の需要に左右され、こののち出荷額がブームの水準にもどることは二度となかった。

表2に、スクラップ市場の不況を伝える一九五七年の記事の見出しをまとめた。これによると、アメリカ合衆国との既契約分が大量に輸入されたことを背景に、本土側で屑鉄が値崩れを起こして大暴落、「琉球からの屑鉄出荷は完全に伸び悩みの状態にあり、取扱業者は

表2 1957年の新聞報道

新聞	月日	見出しなど
沖	0308	スクラップ輸出／先月は大幅に減る
沖	0627	鉄屑暴落続く／本土の鉄屑市況
沖	0701E	屑鉄値大暴落続く／スクラップブームに終止符
沖	0731E	鉄屑需要ぐんと減る
琉	0709E	六月に入ってから以来、スクラップ値が暴落
沖	0802	スクラップ輸出に対策／スクラップ輸出不振
沖	0806	本土側屑鉄買付け中止か
沖	0807	スクラップ市況 お先眞暗／大量ストック抱え悲鳴
沖	0811E	スクラップ市況／輸出見通しつかず
沖	0819	スクラップ輸出お先眞暗
琉	1111	国内屑鉄値引下げ
琉	1211E	スクラップ輸出依然不調

沖：沖繩タイムス、琉：琉球新報、E：夕刊

大量のストックを抱え、大分打撃を受け」ていた(『沖繩タイムス』一九五七年八月七日)。琉球政府は、突如として起こった「スクラップ問題」を打開すべく、台湾への輸出拡大を模索するも(『沖繩タイムス』一九五七年二月一五日)、状況の改善をみることはなかった。それから一年後の一九五八年七月、『琉球新報』は「もはや戦後ではない／戦争の置土産も底をつく」と見出しを打って、次のように解説した。

農家ではくわを捨て、漁家では漁業を捨てて全琉がそのブームにあてこんだスクラップは、五六年七月をヤマにして下降線をたど

り、全く底をついてしまった。戦争の置土産であるこのスクラップのお陰で、無一文からひと財産をつくった人も多く、スクラップを扱う業者が、雨後のタケノコのように続出して琉球経済に大きく寄与したが、陸上、海中ともに物資の減少に伴って収集業者も「この事業もすでに限界に達した。スクラップと手を切るのもこのあたりが一番よい潮時だ」と姿を消し現在僅かに十四、五社だけが細々ながら最後の追込み線に拍車をかけている。スクラップ花やかなりしころの「夢よもう一度」と呼びたいところであろう。またその反面スクラップは一刻千金の夢をみて寄つてたか多くなりの人たちの一命もふっ飛ばすという悲劇も何度かくりかえされた：〔略〕…。

〔琉球新報〕一九五八年七月一日夕刊

このように五年とたたずして、「スクラップ・ブーム」は終焉する。

3 ブームの諸相

スクラップを集めておれば買手はいくらでも殺到する。しかも高値で売こむことができるのでこんな良い商売はない。女や子供、老人にもたやすく仕事ができるうえに資金の回転も早いから繁昌することは確実である。物を生産して売ることになれば当然、収入からコストは差し引かれる。ところがスクラップは山野や海岸線に散在している廃品を拾い集めて金に換えるのであるから、金額がその労働に対する報酬と同じで、個人的にも或は企業、経済全般からみても実益は他のどんな商品でも及ばないことになる。こういった大衆的な所得は直ちに消費と結びつき、生活物資の需要を刺激するといわれ、今年に入って輸入が大幅に増えているの

もスクラップブームに有力な要因があると指摘されている。

〔沖繩タイムス〕一九五六年二月二二日

一九五六年に頂点を迎えた「スクラップ・ブーム」は、市況全般に好影響をもたらした。しかしながら、それと同時に関連する事件・事故・犯罪も連日のように発生したのである。

(一) 窃盗の横行

ブームの及ぼした悪影響のひとつとして、あらゆる金属類を窃盗する行為の横行をあげることができる。一九五三年八月にスクラップを処理する権利が認められる以前から、すでに「屑鉄ドロ」がはびこり、「鍋や道路標識まで」盗み取られていた〔沖繩タイムス〕一九五三年七月一〇日。窃盗犯罪が多発するのは、やはりブームの頂点をなした一九五六年のことで、「那覇市松尾、美栄橋、十区などで軒並みに十三軒が水道メーターを盗まれ、コザでは学校の窓カギを盗む等、この頃のスクラップ泥の跳梁は、目に余るものがある」〔沖繩タイムス〕一九五六年二月一六日夕刊)、あるいは「一時中休みしていた非鉄泥が最近また横行、煙突の避雷針、銅製タライ、スクラップヤードのアルミ屑と片つ端から失敬する始末」〔沖繩タイムス〕一九五六年三月三日」といった具合であった。

とくに深刻化したのが、電線の窃盗である。「一昨年から新らしい窃盗事件として注目されていた電話線と電灯線の切断盗難は、最近になつて特に目立ち、連日連夜切りとられる始末：〔略〕…高圧線を盗む手口などは、専門家を凌ぐ要領を心得ている」というような状況で〔沖繩タイムス〕一九五六年一〇月一三日夕刊)、「電線ドロ」は翌一九五七年まで続発した〔琉球新報〕一九五七年四月二二日夕刊)。

「泡瀬タニタリー・ヒール施設内に入り、スクラップを掘っているのを窃盗現行犯で一度に十二名もつかま」るなどした結果、「六十二才のお婆さんが一人、乳飲み児をかかえた二十四五才の若い母親が三名：〔略〕：最近電話線泥警戒で網にひっかかったのが八名もおり、留置場はこのところスクラップ泥で大入満員」と、中部に位置するコザ署の留置場は窃盗犯であふれかえる（『沖縄タイムス』一九五六年一月一六日夕刊）。

電線ではないものの、「糸満町五区二九班S（二五）、同町四区M（二八）、同町五区二九班M（二二）、伊是名村仲田U（二八）の四人は十八日午前三時ごろ本部町瀬底の沖縄解撤工場の爆弾を盗み運び出すところを監視に見つかって捕った」と報じられるように、「物騒な爆弾泥」まであらわれた（『沖縄タイムス』一九五八年五月二三日）。二〇歳前後の若者たちが、わざわざ糸満から船舶ナンバーを外したクリ船を駆って瀬底島まで乗り付け、爆弾を盗み出そうとしたのだ¹⁰。

このように爆弾を処理する工場、あるいはスクラップを集荷するヤードまでもが標的となり（図2・3）、盗品は別の業者に転売された。

（二） 拾集場としての演習地

陸上の上質なスクラップがとり尽くされて枯渇するなかでも、ブームは人びとをあらゆる場所へと駆り立て、悲惨な事件を引き起こす。ブームさなかの一九五七年年初、ひとりの少年の「爆発死」が報じられた。

現場はバズカー砲弾射撃演習の弾着地で不発弾等も散乱しておりスクラップ（砲弾破片）収集中の出来事だが、当日は朝から第九

戦後沖縄における「スクラップ・ブーム」とその影響



図2 スクラップ・ヤード（撮影年月日・場所不明 [沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵]）



図3 スクラップを積載した船舶（撮影年月日・場所不明 [沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵]）

マリン部隊の射撃演習があつたとい、砲弾のさく裂によるものか不発弾の爆発事故かはつきりした原因が不明で目下石川署が調査中。
〔琉球新報〕一九五七年一月一〇日

立ち入りを禁じられた「金武射撃場内」で小学校六年生の児童が死亡した事故である。一〇代前半の少年が身の危険を冒してまで砲弾の破片を拾集しようとしていたのだ。演習地での砲弾破片なし不発弾の拾集は、沖縄島にかぎられたことではなかった。

：〔略〕：島内の演習地では爆弾投下演習で米軍が投下する演習用弾が一個四千円から六千円まででスクラップに流れ、沈船引揚げの作業員は殆んどが島の人たち〔。〕住民に渡るスクラップ代金は右から左に現金で支払われるのでたちまちスクラップ・ブームと化したのである。

〔沖縄タイムス〕一九五六年一月一五夕刊

これは伊江島の状況の一端である（図4）。一九五五年、伊江島の真謝では米軍による強制的な立ち退きによって土地が接収され、軍用地をめぐる闘争が激化した。その翌年に、同島もまた「スクラップ・ブーム」の波に洗われていたことになる。

伊江島の場合は島民による活動であるものの、演習地まで遠征する動きもみられた。

久米島仲里村真泊漁民のなかには、久米島北方約十四哩の俗称鳥島（軍の演習地）に侵入、砲撃弾の破片を収集しているのがある。当初海が時化、漁撈できぬ日だけやつていたのがスクラップ値上



図4 伊江島におけるスクラップ拾集の光景（撮影年月日・場所不明 [沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵]）

りの最近では、漁撈そつちのけでスクラップ漁りに奔走〔一〕演習地で危険だからと幾ら警告してもきかないという。

〔沖縄タイムス〕一九五六年四月二日夕刊

このように、本業「そつちのけでスクラップ漁りに奔走」する漁業従事者も多かった。しかも、それは離島の米軍演習地へ乗り込んでの拾集である。

二十七日あさ、民政府公安部から警本に渡名喜村入砂島の米軍爆撃演習地の不法立入取締り強化の要望があった。それによると入砂島は、米空軍の永久演習指定地で連日爆撃演習を続けているが、最近その破片や不発弾目当てのスクラップあさりのくり舟漁夫がたかり二、三日前には危険のため演習を中止したほど。那覇署の警備艇で海上警備を強化する。

〔沖縄タイムス〕一九五八年三月二十九日

この記事には「死線をこえて：／爆撃演習地にたかる屑鉄あさり」という見出しが打たれた。久米島の真泊と同様、海上の移動性に長けた漁業者が積極的に参入するなどして、演習部隊を追いかける「スクラップ亡者」が各地に出没したのである（『沖縄タイムス』一九五九年二月一七日）。陸上の上質なスクラップがとり尽くされて枯渇するなかでもつづいた「スクラップ・ブーム」に、漁業従事者たちはさまざまに関わりあい、そして巻き込まれていく。

（三）漁から漁りへ

海浜・海上のスクラップが注目を集め、「魚を獲るよりはスクラツ

プを集めた方が手取早くもうかるというのでクリ舟が相当数、海中の屑鉄をあさっている」という状況が、はやくも一九五五年一月に「魚獲るより屑鉄漁り」と題して報じられている（『沖繩タイムス』一九五五年一月二四日夕刊）。

ブームの波は離島漁業にもおよんだ。

座間味村座間味部落は、鯉漁業の先覚者松田翁の出身地として最近まで鯉漁業、鯉節業を中心にした鯉業が盛んで、毎年経済局主催のコンクールでも表彰されていた優良漁業部落だったが、この頃は漁業そつちのけでスクラップ漁りで賑わっている〔。〕これは今年の鯉業が餌不足のため振わず、一時的にスクラップ漁りをやり出したものの、鯉業では一日五十円―二百円と不安定な収入だったものが、スクラップ収集では平均二百円の収入が得られたため、約七十名の部落の漁民たちは部落に二艘あるダイバー船を利用、七、八名一組でグループを作つて本格的にスクラップ漁りに転向した。

同島周辺は去る大戦で米軍初の上陸地点となつたため戦後でも沈没船舶の残骸が多かつたし、その大部分は本土スクラップ業者の手で引揚げられたが、小破片類はまだ豊富に放置されているためである。
（『沖繩タイムス』一九五六年一〇月四日）

鯉漁ならびに鯉節の製造業を中心とする地区でありながら、「漁業そつちのけでスクラップ漁り」に練り出していた。しかも、「二艘あるダイバー船を利用、七、八名一組でグループを作」るなど、漁業従事者ならではの本格的な「スクラップ漁り」であった。

糸満もまたスクラップ収集の拠点となつたことで知られる漁業集落



図5 1950年代の糸満港（撮影年月日・場所不明 [沖繩市総務部総務課市史編集担当所蔵]）

である(図5)。

最近のスクラップブームの波にのつてくり舟など大半は屑鉄拾いに走っている現状にある〔。〕食つて生きるためにはこの方が儲かることでの多いものは一日に千円分も収集できる。平素から海でくらししているため何処に何があるかを呑みこんで、魚をとるよりは軽易である。零細業者はブームで潤っているようだ。

(『沖繩タイムス』一九五八年七月一九日夕刊)

図5の写真を所蔵した、『ひめゆりの塔』の著者として知られる石野径一郎は、その裏面に「糸満港 スクラップ船などが見える 沖繩の代表的な漁港も全く変貌した」と鉛筆で書き込んでいた¹⁾。当時の糸満の産業は以下のように説明されている。

漁業に従事している戸数は九四六戸、漁夫数が一四六六人。全体の三五%が直接海で暮をたてている。陸上においては加工業、販売、造船、製氷などの関連事業がおこっており、糸満の経済は漁業をジクとして回転している。

漁船の数は動力船二五隻、五屯未満の小型船二〇隻、ほかにくり舟が三五〇隻ほどある。²⁾

「スクラップブームの波にのつてくり舟など大半は屑鉄拾いに走っている」、というのが当時の状況であったとするならば、数百という規模で「くり舟」がスクラップ拾集にくり出していたことになる。

「沖繩の代表的な漁港も全く変貌した」というコメントは、旧来の糸満の姿を知る者の実感であったにちがいない。

戦後沖繩における「スクラップ・ブーム」とその影響

(四) ダイナマイト密漁

後掲の事故現場の写真(図7)の裏には、「火薬は密漁鉄はスクラップとして売る」と鉛筆で記されている(図6)。火薬を抜き取った不発弾はスクラップとして業者に売り払われる一方、火薬だけをつけて手製のダイナマイトがつくられ、爆破漁に流用された。「黄色火薬は砲弾のスクラップから抜いたのが簡単に入手され、雷管は工事

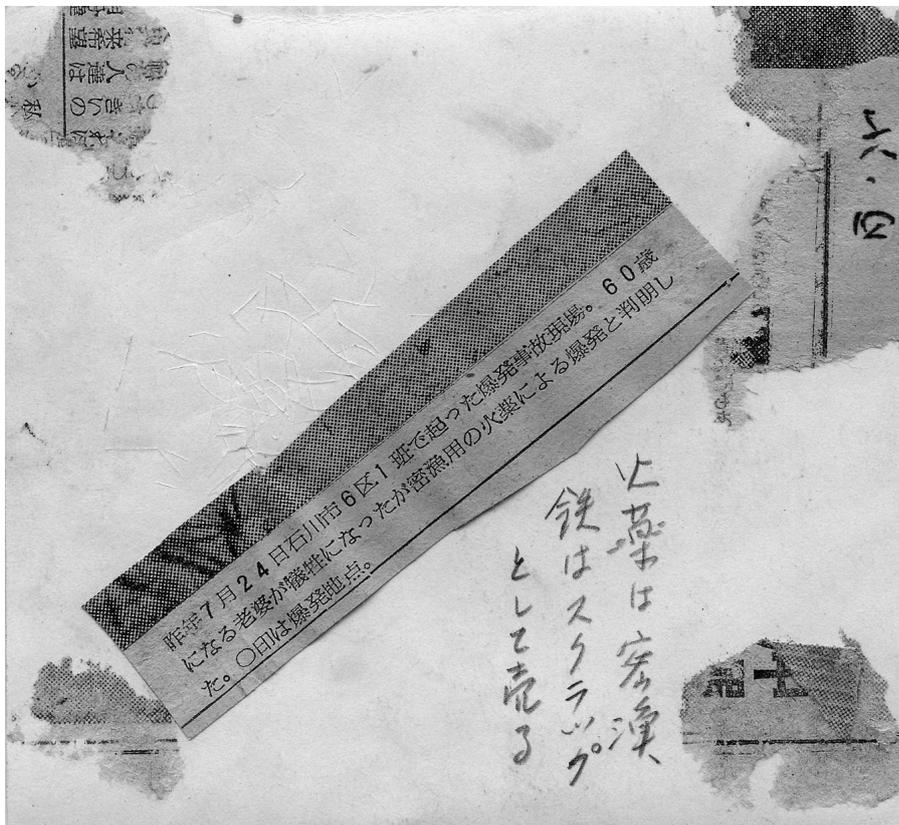


図6 爆発現場写真の裏面(沖繩市総務部総務課市史編集担当所蔵)



図7 石川市における爆発事故現場（撮影年月日・場所不明 [沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵]）

用の横流しが多く、ダイナマイトの製造など「その気にさえなれば
わけない」ことであった（『沖縄タイムス』一九五八年九月四日）。

「不法密漁の多いところは、中城湾（一）金武湾一帯をはじめ、糸満
沖、ケラマ列島が件数も多く、離島では宮古の北海岸、八重山では川
平湾一帯となっている」と指摘され（『沖縄タイムス』一九五八年九月四
日）、なかでも中城湾一帯では夜毎に密漁が行なわれた。

勝連村南風原漁協は、ナイロン網による建干漁業は沖縄でも非常

に盛んなどころとして知られているが、最近、近海にダイナマイ
ト密漁が横行、魚族が少くなり、組合員の生活は日増しに苦しく
なっている。中城湾津堅島一帯には、毎晩十四、五発から二十発
の爆発音がとどろき、法をおそれぬ密漁が平然と行われており、
南風原漁協の船が追跡しても、逃げ足が早くつかまらないとい
う。（『沖縄タイムス』一九五八年九月二日）

ダイナマイトをもちいた密漁によって海は荒らされ、湾岸集落の漁
業従事者たちは生活が苦しくなるほどの影響を受けていた。沿岸の浅
い海域でスルル（キビナゴ）やテンジクダイ（イシモチ）などの小さい
魚類を小型のダイナマイトによって捕獲し、今度はそれらを撒き餌にし
て大きい魚の集まったところを大型のダイナマイトで一網打尽にする
という「計画的な密漁」も行なわれていたのである（『沖縄タイムス』一
九五六年六月五日）。「ダイナマイトによって魚の餌であるプランクトンは
もちろん稚魚まで死滅し、そのため沿岸漁場は戦前とくらべられない
ほど荒廃し、沖合漁業へ転換する余裕もない零細な漁民にとっては、
死活問題」となっていたのだった（『沖縄タイムス』一九五六年六月五
日）。

沿岸の漁場が荒廃した結果、密漁の場も次第に沖合へと移動する。

4 ブームの裏面「スクラップ地獄」

（一）多発する事故

「スクラップ・ブーム」が過熱するなかで連日のように報じられた
のが、多発する事件・事故である。その諸相については前節で瞥見し
たが、より深刻化したのは負傷・死亡をとまなう人的被害のひろがり

であった。一九五六年四月八日朝、沖縄社会に衝撃をあたえた事件が発生する。

越来村山里に家族四人で暮らす女性(三三歳)は、その日の早朝、子ども三人を自宅に残して夫や近隣の住人ともどもスクラップ拾いでかけた。夫とは途中でわかれ、美里村知花で作業をしていたころ、本人が認識していたかどうかはともかく、嘉手納弾薬庫の地区内に入り込んでしまいガードに射撃されたのである。大山にある陸軍病院に搬送されたものの、間もなく死亡が確認された(『沖縄タイムス』一九五六年四月八日夕刊)。

その後、このような事件が起こることはなかったものの、一九五六年から一九五七年にかけて痛ましい事故が相次ぐ。砲弾などの爆発物から火薬を抜き取り、その屑鉄をスクラップ業者に売り払う一方、抜き取った火薬を漁業者に密売ないし自らの手でダイナマイトを製造する過程で起こる爆発事故が後を絶たなかったのである。「…〔略〕…スクラップの値上り、そのうえ運が良ければ、抜取った火薬も密漁者間でひく手あまたの売行きというスクラップと火薬二股がけの儲けが、絶えぬ惨事の誘因」となっていたのだ(『沖縄タイムス』一九五六年一月二四日夕刊)。スクラップが高値で売れるうえに、火薬をもちいた密漁に手を染めていた漁業従事者にとって、砲弾の処理はまさに一石二鳥の作業であった。しかしながら、その代償は高く、ひとたび爆発事故を起こすと、大切な家族まで失う惨事となる(図7)。

表3は、戦後沖縄における爆発事故の経年変化をまとめたものである。戦後三か年にわたり一〇〇件を超えているのは、不発弾の処理を誤ったことなどによる爆発とみてよい。その後も数十名の死者を出しつつづけるが、件数のピークはブームと同じ一九五六年にあり、翌一九五七年にかけて多数の被害者を出す。ブームの終焉する一九五七年は

表3 爆発事故の経年変化

年	件数	死亡者数	負傷者数
1946	113	93	102
1947	164	118	194
1948	112	59	121
1949	72	32	74
1950	48	22	38
1951	42	24	39
1952	43	18	28
1953	54	33	64
1954	45	20	49
1955	41	22	41
1956	89	64	108
1957	53	65	51
計	876	570	1,107

前年にくらべると三六件減少しているものの、死者数は前年を上回った。

最近では爆発事故のない日が珍しい位。そのうえ山野に散乱する砲弾は殆んど取りつくし今度は、軍弾薬処理隊が、海中に投棄した砲弾までつけ狙い、砲弾拾いの舞台もこの頃では、陸と海にまたがり、海上での事故も増えてきた。

(『沖縄タイムス』一九五六年一月二四日夕刊)

ここに指摘されるように、一九五六年から一九五七年にかけてスクラップ拾集が「沈船漁り」へと移行するのにあわせて、事故の発生現場も海域へとひろがる。

那覇港沖合の沈船漁りは大部分が安謝の漁夫と二十一日安謝交番から那覇署につぎの通り報告があった。

爆薬を使う沈船漁りは軍の警告を尻目に一向に後を絶たない。調べた結果、この漁夫は昨年末から安謝に乗りこんで来た伊是名、伊平屋、糸満辺りの漁夫で宮古からきたものもいる。

海上警備がきびしくなったこの頃は夜明けを見計って沈船を漁

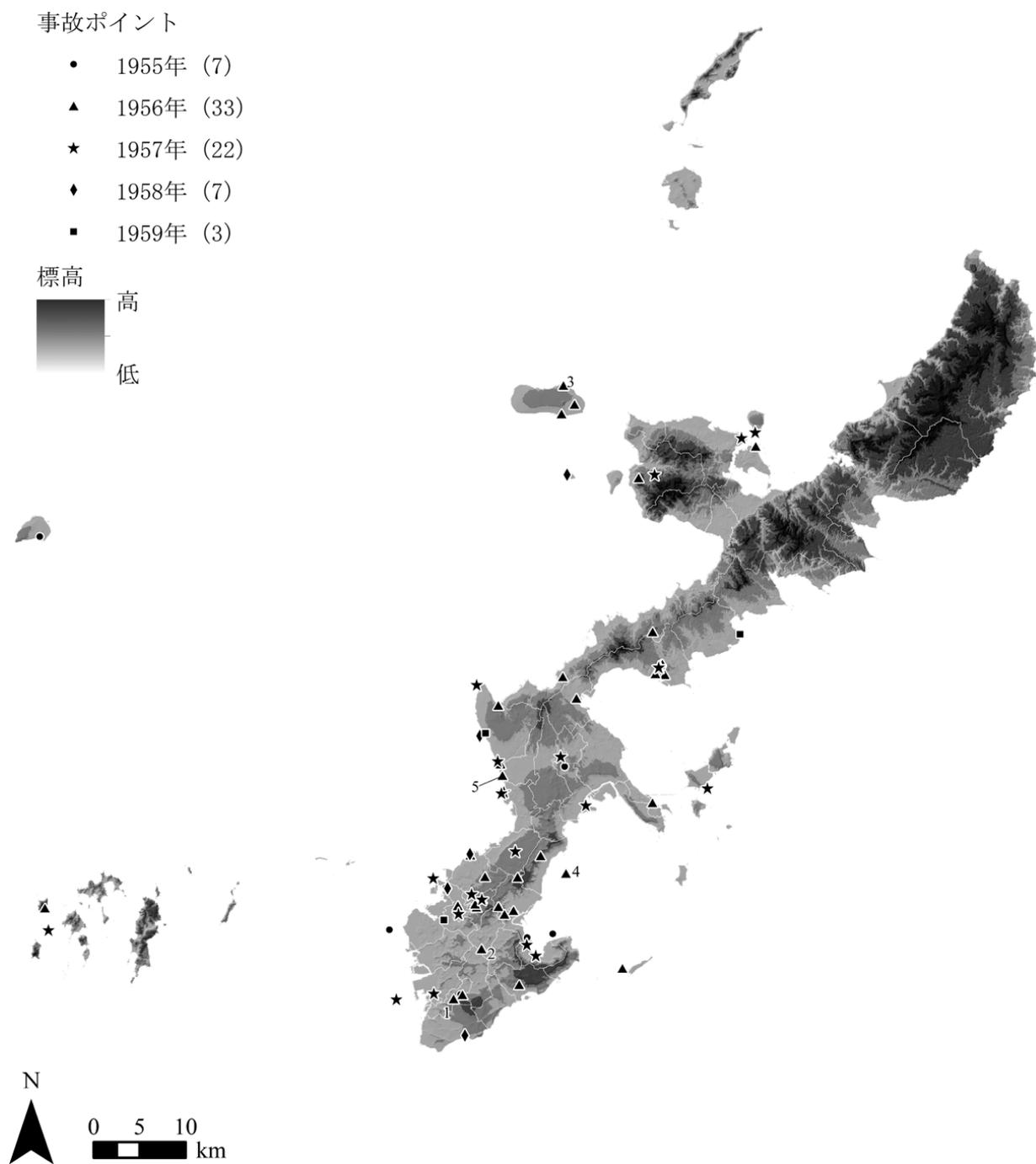


図8 スクラップ事故の分布（『沖縄タイムス』・『琉球新報』の記事から場所を特定した。）

りその都度爆薬を使う。収集した鉄板は六百円から八百円の好値でひっぱりだこの売行とあつて漁夫は増える一方だという。

〔沖繩タイムス〕一九五七年三月二三日夕刊

沈船を爆破して鉄を拾い集める過激な方法もとられる一方、沈船や海底から砲弾を拾い集めて火薬を抜き取る際に爆発する事故も多発した（『沖繩タイムス』一九五七年七月八日夕刊）。このようななかで、一九五七年六月には座間味村の阿嘉島沖で、翌一九五八年四月には読谷村の都屋沖で沈船の爆発事故が発生する。

(二) 事故の時空間分布

「スクラップ地獄」と称された人的被害は「スクラップ・ブーム」最大の負の側面である。図8には、スクラップ拾集において一九五五年から一九五九年にかけて発生した事故の場所について、『琉球新報』・『沖繩タイムス』の記事から判明した分をプロットした。両紙で報じられていない事故、あるいはわたしたち筆者の記事の見落としを考慮すると、ブームに関連した事故の空間的なひろがりや分布傾向をある程度まで読み取ることができるだろう。各年のプロット件数は、一九五五年七件、一九五六年三三件、一九五七年二二件、一九五八年七件、一九五九年三件となった。ブームのピークを迎えた一九五六年に記事の件数も最大となり、それ以降は減少する。

まず全体を俯瞰すると、沖繩島北部から名護市にかけて標高の高い場所ではまったくといってよいほど分布しておらず、本部半島と中南部、そして伊江島に集中していることがわかる。これは当然のことながら、沖繩戦における苛烈な戦闘に係しているものとみてよい。比較的サンプル数の多い一九五六年（▲）と一九五七年（★）の分布に

表4 1957年の新聞報道

年	1956				1957			
	1~3	4~6	7~9	10~12	1~3	4~6	7~9	10~12
内陸	16	3	3	3	6	4	2	1
海岸	4	0	0	1	1	3	0	0
海上	0	0	0	3	0	4	1	0

ついて検討をくわえてみよう。

事故の発生場所は内陸／沿岸／海上に区分することができる。これら三つの地理的区分における事故の発生件数を一九五六年と一九五七年とで三か月毎に集計したのが表4である。

内陸の事故は、一九五六年の一～三月期に突出して多いものの、両年を通じてコンスタントに発生している。沿岸の事故は、両年ともほぼ同じ件数であった。ただし、図8によると、一九五七年は一九五六年と比べてやや海側の集落で増加している。海上の事故は、一九五六年の一〇～一二月期にあらわれ、翌一九五七年に微増した。

川平成雄はスクラップの拾集場所と事故の発生場所について、陸上から海上へと変化したことを指摘したが、これはスクラップの取り扱いが段階的に規制緩和されたことに呼応するブーム全体の傾向を表現したものである。とはいえ、新聞記事にもとづきプロットした事故の分布をみると、沿岸や海上の事故が増加傾向にあったわけではなく、依然として内陸でスクラップの拾集がなされており、それにとまらぬ爆発事故も発生していたことがわかる。

内陸／沿岸／海上の三区分に典型的な事故について、その概況を新聞報道から垣間見ておこう。以下の文に付記した「」内の番号は、図8にプロットした事故発生地点と対応している。

内陸の事故は、一九五六年に限ってみても金武村、西原村、浦添町、那覇市、南風原村、高嶺村などで起こっている。「十四日ひる二

時ごろ高嶺村大里、農業、A(三四)、同農業T(三〇)の二人が、東風平村世明城俗称ハンタ毛原で、付近の原野から拾い集めた米製十糧砲弾の火薬抜取中、爆発した(『沖繩タイムス』一九五六年三月十五日「1」)。この記事には「またも火薬抜取り、即死」と見出しがつけられていることから、同様の事故が続発していたこともわかる。同年の九月二〇日には「南風原村山川区内ハサマ原の旧日本軍壕でスクラップあさり中爆発事故が発生」し、六名が死亡した(『沖繩タイムス』一九五六年九月二日夕刊「2」)。原野のみならず、壕内でも拾集されていた。

前述したように、砲弾などの爆発物は屑鉄としてだけではなく、抜き取った火薬も密漁にもちいられた。それゆえ、「二日午前十一時ごろ、伊江村東江上区三班、スクラップ収集業、U(二三)は区内米軍弾薬集積所俗称イリウツ海岸で密漁中爆死した」というように(『沖繩タイムス』一九五六年二月四日夕刊「3」)、沿岸の事故には「ダイナマ密漁中」の「爆死」もふくまれる。

「三日午後二時半ごろ中城湾海上、二千米沖合で、中城村浜区三班、Y(四三)と真和志市安謝区、以下不詳、通称G(二十六才位)の二人がクリ舟でスクラップ収集作業中、拾いあげた砲弾のようなものがとつぜん爆発した」という事例は、海上型の典型といつてよい(『沖繩タイムス』一九五六年二月四日「4」)。一本の木をくり抜いて作られた小型の舟Ⅱ(くり舟)で、沖合に繰り出し砲弾を海中から引き揚げると途中、あるいは引き上げた砲弾から火薬を抜き取る作業中の爆発事故も頻発した。

くり舟では難しかろうが、漁船をもちいたスクラップ拾集では海中の沈没船もターゲットとなる。「嘉手納村字兼久沖の離島で砲弾が爆発、四人は即死、五人重傷、二人が軽傷を負った」と報じられる事故

は、「タガネを使って百五ミリ砲弾の真鍮輪金を抜取中突然、砲弾がさく裂」したことによるものであった(『沖繩タイムス』一九五六年二月八日「5」)。この部分だけを読むと、離島の内陸ないし沿岸のスクラップ拾集にもみえなくはない。だが、「事故現場には数百個の砲弾が山積み、いずれも真鍮輪金が抜取られた点からみても読谷村十屋沖合の沈船から砲弾を盗み出し、ここで真鍮抜取を続けていた形跡があり、負傷者や逃げのびた一味数人は火薬抜取り、沈船破かいの常習」とされるように、これは大型の沈船をめぐる組織的かつ大規模な海上作業の結末であった。

この都屋沖の沈船は、のちに多くの人命を奪うことになる。

(三) 座間味村阿嘉島沖の沈船爆発事故(一九五七年六月)

天地をゆるがす大爆音、一回、二回、三回、四回……その度毎に閃光が眼を射り大水柱を伴って空中に吹きあげる。二百米ほどもあるうか、シネスコで見る原子雲のように空高く吹上げた水柱のために向う側の島さえ見えない。六月三十日午後六時：座間味沖で沈船解体中の三十二(推定)の生命が永久に海の屑となつて消え去つた一瞬である。生存者はもちろん遺留品さえなく海は静かだ。(『琉球新報』一九五七年七月二日夕刊)¹³

一九五七年六月三〇日、座間味村阿嘉島の南西約二キロメートル沖で、サンパン四隻が「沈船漁り」をしていたところ、海底の船体が突然爆発、一瞬にして三十余名の命が奪われる事故が起こった(図9)。慶良間列島西部に位置する海域で、付近の阿嘉島・慶留間島・座間味島に暮らす住民は「物凄い爆音に戦争が始まったのではないかと感

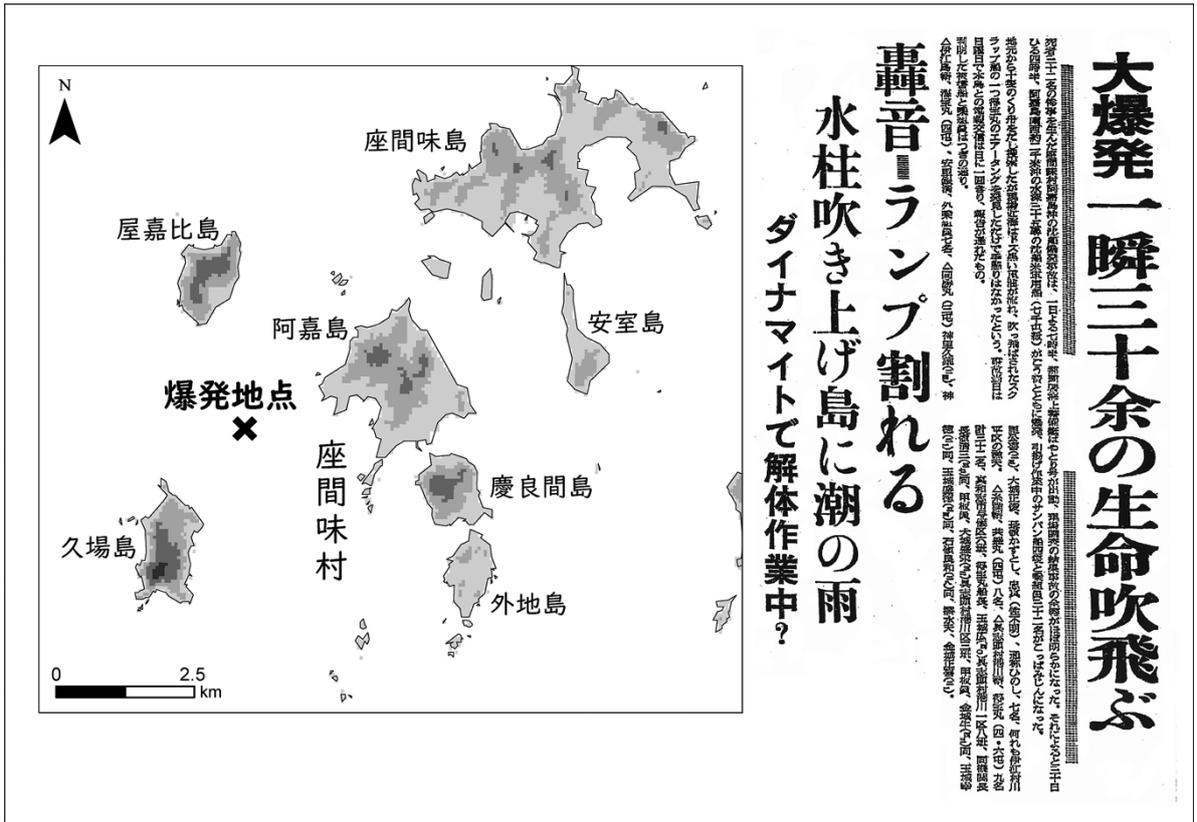


図9 阿嘉島沖の爆発地点と新聞報道 (記事出典：『沖縄タイムス』1957年7月2日)

じ、老人や女子供の中には泣き叫ぶ者さえ出る有様」であったとい

う。
爆音がとどろいたあとには室内のランプが割れるほどの大きな地震
が起こり、直後、阿嘉島と慶留間島には津波が押し寄せる。両島南西
岸の住民が「阿鼻叫喚しながら山手の方に避難」すると、こんどは塩
分をふくんだ降水にあった。爆発にともなう水柱は高さにして二〇〇
メートルに達したといい、海水がまき散らされたのだ。「誰しも沈船
の爆発事故」などとは夢想だにせず、「戦争が始まって糸満のあたり
に原爆でも落されたのでは」ないかとささやきあったという。

他方、「嫌がるスクラップ業者」を説得して現場に急行した座間味
駐在の巡査は、静寂とした海上の光景を目の当たりにする。

そこで毎日働いていたサンパン（スクラップ集積船四トン内外）
は影も形もない。真つ黒になって働いていた潜水夫たちの姿もな
い。事故現場は唯ドス黒いコールドールがモクモクと浮上してい
るだけで何事もなかったかのように静かだ。

一九五七年当時、座間味村周辺に「海中スクラップが相当量ある」
ことはひろく知れわたり、沖縄島中南部や伊江島あたりの漁業者がに
わかスクラップ漁りにあつまりはじめた。そもそもそのきっかけは、
布令九八号にもとづき座間味村と契約して周辺海域のスクラップ収集
に参入した「共和サルベージ」社が、「たまたま阿嘉島沖で米軍用沈
船を発見」したことにある。同社の契約が一九五六年一二月に満了
し、いったんは一九五七年四月まで更新しながらも撤退、なおかつ入
札もなされていない状態のなかで、不法収集が横行する。

偶然に発見された沈船は、第二次世界大戦中にアメリカ合衆国で製

造された大型貨物船リバティであった。リバティは船名ではなく、規格型船舶の総称である。「船名は不明、戦争中漁雷により沈没した」というのだが、問題は総重量三千トンにもおよぶ「爆発物」を積載したまま沈没していたことにある。

リバティの沈没した海域は水深が深いうえに、潮流も早く、スクラップを引き揚げる環境としては最悪であった。「作業は一日一時間から二時間位しか出来ずしかも大型タンクや大型機械がないと収集は不可能とみられていた」なかで、「伊是名、伊平屋、伊江島、糸満、港川、最近は遠く宮古辺りからもつめかけ、座間味を根拠に沈船破壊」がつけられた（『沖繩タイムス』一九五七年七月二日夕刊）。サンパン四隻も、これにくわわっていたのだろう。原因は、「沈船破壊につかつた火薬の衝撃で沈船の積載砲弾類を爆発させ惨事を起したものと推定されている（同前）。

被害にあつたサンパンとその乗組員は、海宝丸と勝丸の二隻で一五名、得宝丸九名と共進丸八名の計三二名とされる。関係者の証言によると、伊江船籍の勝丸と糸満船籍の海宝丸は、前日二九日午前一〇時ごろに伊江島を出港、途中、「嘉手納に立寄つて潜水夫を乗せ」てから座間味に向かった。判明した乗組員の年齢をみると、二〇代が九名、三〇代が三名、四〇代以上は二名であった。二〇代の青年を中心に構成されていたことがわかる。

被害者のなかには、那覇市の海浜からは離れた内陸地区の出身者もふくまれていた。突如として夫を失った妻は、「いつもの通り漁にかけたものと思」いこんでおり、「スクラップ収集にいったとは夢にも思わなかったという」。危険を顧みずにスクラップ漁りに手を染める漁業従事者が座間味沖にあつまっていたのである。

この大事故が起こつてなお、沈船漁りがやむことはなかった。事故

から四か月後には、再び「屑鉄亡者」が姿をあらわす。

爆発一瞬、三十余人の命が吹っ飛んだ座間味沖の沈船に最近またスクラップ漁りがたかっている、と二十一日那覇署に報告があつた。それによると、九月下旬命知らずのダイバーが沈船にもぐり一山あてたことからスクラップ漁りが再開、それもさきの爆発で船体はこなごな、爆発物を使わなくても収集できるうえ、現場で屯当り五千円の品が陸地まで運べば八千円にはねあがる屑鉄ブームのつて同業者は殺到、嘉手納、糸満、座間味の各地から連日四隻以上の収集船がたかっているという。

（『沖繩タイムス』一九五七年一〇月二六日夕刊）

ブームそれ自体は終末にさしかかっていたものの、沈船は海の蟻地獄のごとくに漁業者たちを吸い寄せていた。座間味沖のリバティ船爆発事故後、琉球政府の海運課長が次のように述べている。

弾薬処理については、戦後十三年も経過しているので非常な危険をとまなうので民政府としても解体作業には慎重を期しており、この種の艦船はまだ一隻も処理された例はない。このため先に弾薬船処理申請一号としてワシントンの許可を得た読谷沖の米艦船の場合も、民政府で処理方法を検討した結果「これを安全に処理する方法は見出せない」として数カ月間も保留のままになっている程である。座間味沖で爆発事故を起したりリバティ船もこれと同様な危険な状態にあつたもので無謀にも米軍財産への盗難行為をなし多くの死者を出したことはまことに遺憾である。

「これを安全に処理する方法は見出せない」——座間味のリバティと同様、処理不可能とされる沈船が一隻、読谷沖に存在していた。

(四) 読谷村都屋沖の沈船爆発事故（一九五八年四月）

金へんブームを招いたスクラップ・ブームが時とともに流されるとスクラップ地獄とよばれた爆発事故も、去年六月末に起きた座間味の一大惨事をさかいに日に日に減少の一途を辿り、一時スクラップ旋風でよろめいていた街や村は景気の下火とともに落着きと立直りを見せてきた。

〔琉球新報〕一九五八年一月一九日夕刊

一九五七年六月に発生した阿嘉島沖の沈船爆発以降、事故は「減少の一途を辿り」つつあると報じられたのは、年を越えた一月のことだ。しかしながら、この記事は「スクラップ地獄は全く絶えたわけではなく、いまでも思い出したように散発はするが、ただ規模が小さいというだけに過ぎず、戦後十三年の春を迎えた今日でも爆発事故で櫛子の歯の抜けるように死んでいく人々は少なくない」とつづけられた。それから三か月後の四月一七日、まさに前年の阿嘉島沖を想起させる出来事が発生する。同日一六時五〇分頃、読谷村都屋沖で沈船が爆発し、スクラップ漁りに出ていたサンパンとくり舟計四隻の乗組員が行方不明となった(図10)。

事故を目撃した都屋の住民は、「耳をつんざく大音響とともに家がゆれ」たため「沖の沈船付近」を目視したところ、そこには「雲をつく水柱がたちのぼり」、あたり一帯が「海底から吹きでる白煙につつまれ」ていた。座間味の事故から間もないうえに、住民たちは沈船漁

戦後沖縄における「スクラップ・ブーム」とその影響

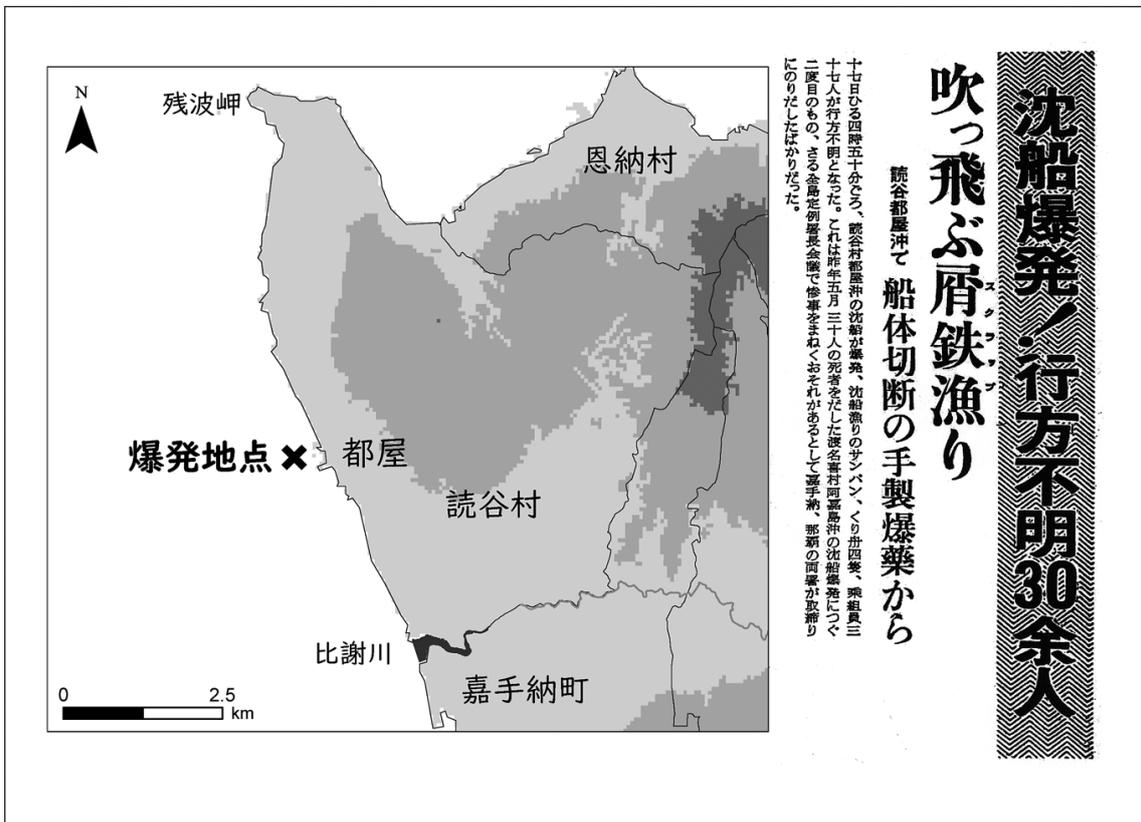


図10 都屋沖の爆発地点と新聞報道（記事出典：『沖縄タイムス』1958年4月18日）

りを日常的に目の当たりにしてきたことから、すぐさま沈船の爆発事故と認識されたのである。現場に向かった嘉手納署員は、「爆風で吹つとんだサンパンやくり舟、行方不明者の手がかりはなく、あたり一面こげくさい悪臭がたちこめるという惨状」を報告した。

爆発した沈船は貨物船（カナダ・ヴィクトリー）で、沖繩戦さなかの一九四五年四月二十七日に特攻隊の体当りを受けて沈没したという。阿嘉島沖のリバティと同様、「砲弾を満載し艦砲も全部装填したまま」沈んでいたことから、スクラップの宝庫であると同時にいつ爆発してもおかしくない火薬庫のような状態にあった。この海域は、布令一四四号（一九五七年七月一日）によって立ち入りが禁じられた一方、読谷村側からも撤去の要望が出されていたというのだが、すでにみたとおり「安全に処理する方法」は見当たらず、やむなく放置されたままとなっていた。

そこに、「毎日十数隻のサンパンがたかり」、「糸満や伊是名あたりからも通いつめ」るほどに沈船漁りが横行し、結果として前年の阿嘉島沖を再現するかのとき爆発事故が発生する。

原因は阿嘉島沖のケースとそっくり、スクラップ漁りが、コーラ瓶に黄色火薬やTNTを詰め雷管をとりつけた手製爆薬で沈船を爆破作業中、その衝動で沈船に満載した砲弾類を爆発させたものとみられている。

爆発に巻き込まれた船舶とその乗組員は五隻の計四〇名⁽¹⁵⁾で、前年の事故を上回る大惨事となった。乗組員は二〇代が二四名、三〇代が一名、四〇代以上は四名と（年齢不詳の一名をのぞく）、やはり二〇代の青年が多い。残された家族が、「十七日早朝出かけていきました。

しかし沈船付近にいったことはなく、前の日でも四時半ごろ残波岬の近くでイカリをおろしているものをみた人もいました。それで帰りを待っていたのですが：まだあきらめられませんが」とスクラップ漁りが家族に知らされていない点も、阿嘉島沖の事故と同様であった。

新聞記事には、明暗を分けた船舶についても取り上げられている。「十五日同沈船付近ではスクラップ漁りをして捕った十三人はいま嘉手納署に留置されているが、こんどの事故を知り、命拾いを喜んでいる」という者たちがいる一方で、「三笠丸：〔略〕：は、さきの座間味での爆発事故のさい爆発寸前に現場からひきあげた幸運の船だったが、十一人乗ったまま行方をたっている」と、阿嘉島沖の爆発をまぬかれたあとも沈船漁りをつづけて事故に巻き込まれた者たちもいた。どちらも海上の出来事であるものの、二つの事故は地続きであったとみなされなければなるまい。

実際、阿嘉島沖の事故に先んじて、「読谷沖海上で約三十名位のスクラップ収集業者達が、五隻の大型くり舟に分乗砲弾類を積んで沈没している船を爆発物を使って海中解体作業」をしていたのである（『琉球新報』一九五七年一月二十九日）。さらに、阿嘉島沖の事故からわずか三か月後にも、

読谷村都屋沖の沈船をめぐるスクラップあさりには、取締りの強化と同水域がオフ・リミッツをくったため、一時数十名を数えた不法者たちも、その後影をひそめ、その大半は平安座あたりに散っていたというが、このほど嘉手納署に入った情報では、最近再びこの沈船から弾薬の引上げが行われているという。二隻の引上げ船が二、三回にわたり日暮れ時をねらって、弾薬を引上げその場で解撤、糸満方面の業者に薬きょうを売り渡しているといわれ、

他の一味も近く再び嘉手納、読谷あたりに舞もどるとのことで、同署ではその動向に気を配っている。

〔琉球新報〕一九五七年九月二五日々刊

というように、組織的な弾薬漁りが繰り返られていた。すでにみたこともかさなるが、「読谷村沖合には戦争中沈んだりバティー船（約一万トン級）が砲弾類を抱えて放置され、その周辺はスクラップ（主に葉きょう類）の宝庫といわれ」ていた（『沖縄タイムス』一九五七年一月二四日々刊）。

一九五七年六月の事故後にあらわれた光景が都屋沖でも再現される。すなわち、事故から三か月後には「沈船ビクトリア号にまたまたスクラップ収集者がたかり」（『沖縄タイムス』一九五八年七月一九日）、「沈船の破片目当てに連日くり舟が出入り」していた（『沖縄タイムス』一九五八年八月三日日々刊）。これもまたブーム終末期の光景である。

戦前の都屋は、八月に水揚げの最盛期をむかえる沿岸漁業、そして冬季に長崎県や山口県まで出漁して行なわれる追い込み漁でいうお、読谷村きつての豊かな集落のひとつであった¹⁶。ところが、戦後は米軍の施設から未処理のまま垂れ流される汚水や油で沿岸の環境が破壊され、好漁場である沈船周辺は立ち入り禁止となり、好漁場の残波岬周辺も演習地域のために出漁できない日があるなど、漁業を基幹産業とする暮らしが困難となっていた。事故が起こるまでスクラップ拾収にたよらざるを得ない住民もいた、というのが実情である。

戦争のみならず戦後の「スクラップ・ブーム」にも翻弄された村の姿の一端が浮かびあがる。

5 まとめ

以上にみてきたように、一九五〇年代の沖縄では基幹産業である糖業の安定性を基盤としつつ、需要に応じて不可抗力的変動するスクラップ輸出に依存した経済が出来た。それは、琉球政府の財政面にも寄与し、また市民経済における消費力の伸長をもたらしたという点で、限られた空間時間に成立した「スクラップ経済」と呼ぶこともできよう。

しかしながら、同じくそれが「ブーム」と称される世相ともなつて老若男女を問わずに巻き込みながら、事件・事故を引き起こした。なかでも頻発する爆発事故によつて、一九五三年から一九五七年に限つてみても、二〇〇名以上の死者を数える。その翌年にも読谷村都屋沖の沈船爆発事故で四〇名の命が奪われたことは、すでにみたとおりである。

『経済白書』の冒頭に「もはや戦後ではない」と記された一九五六年、占領統治下の沖縄は本土のスクラップ需要に翻弄されていたのだ。

付記

本稿は、二〇二二年人文地理学会大会（二〇二二年一月一九・二〇日於・佛教大学）でポスター発表した内容をまとめたものである。

注

- (1) 瀬長亀次郎『沖縄からの報告』岩波新書、一九五九年、六一六六頁。
- (2) 松田賀孝『戦後沖縄社会経済史研究』東京大学出版会、一九八一年、四二二四二七頁。

- (3) 沖縄タイムス社編『庶民がつづる沖縄戦後生活史』沖縄タイムス社、一九八八年、一〇二―一〇七頁。新屋敷弥生「スクラップブーム」(「沖縄を知る事典」編集委員会編『沖縄を知る事典』日外アソシエーツ株式会社、二〇〇〇年)、八七頁。琉球新報社編『沖縄 20世紀の光芒』琉球新報社、二〇〇〇年、二七―二七八頁。川平成雄・松田賀孝・新木順子編『戦後沖縄生活史事典 1945-1972』吉川弘文館、二〇二二年、二六四―二六六頁。
- (4) 川平成雄『沖縄占領下を生き抜く軍用地・通貨・毒ガス』吉川弘文館、二〇二二年、五〇―六三頁。
- (5) 一九五五年五月下旬のおもな出荷先は、大阪(一九五〇トン)、八幡(一〇〇トン)、東京(五〇〇トン)、神戸(三〇〇トン)であった(『沖縄タイムス』一九五五年五月三〇日)。
- (6) 沖縄県公文書館が公開している「米国民政府布令(Civil Administration Ordinance (一九五三年―一九五七年、第〇九三号―第一七一号))」(資料コード:RDAP00029)にふくまれる布令第一四二号を参照。
- (7) 本稿で使用する写真は、すべて加藤政洋・河角直美・前田一馬編『写真資料にみる1950年代沖縄の社会と景観』(河角直美研究室・加藤政洋研究室、二〇二二年)に収録したもので、写真のオリジナルは沖縄市総務部総務課市史編集担当に寄贈し保管されている。
- (8) 沖縄タイムス社編『沖縄年鑑 一九五九年度』沖縄タイムス社、一九五九年、三八八―二八九頁。
- (9) 大宜見朝徳編『沖縄商工名鑑 一九五六年版』沖縄興信所、一九五六年、一九五―一九六頁。
- (10) 「沖縄解撤工場」とは、一九五五年二月に創立された沖縄解撤工業株式会社(本社・那覇)の工場である。同社は、「琉球に於ける砲弾其他爆発物の

- 処理業の免許を受けスクラップの輸出入」にも携わる、業界でも屈指の商社のひとつであった。瀬底島の工場は「嘉手納、本部、糸満、港川等沖縄本島周辺の深海の爆発物の集荷処理」をもつぱらとする「近代設備」を有しており、日本から招聘した技術者八名にくわえ、従業員七〇名をかかえる大規模な施設である。大宜見朝徳編『沖縄商工名鑑(一九五七年版)』沖縄興信所、一九五七年、一一九頁。
- (11) 詳細は、前掲の加藤政洋・河角直美・前田一馬編『写真資料にみる1950年代沖縄の社会と景観』を参照されたい。
- (12) 沖縄タイムス社編『新郷土地図 沖縄第2巻 南部編』沖縄タイムス社、一九五七年、七頁。
- (13) 以下の記述は同紙ならびに『沖縄タイムス』同日夕刊の記事にもとづく。
- (14) 以下の記述は『沖縄タイムス』(一九五八年四月一日)の記事にもとづく。
- (15) 以下の記述は『沖縄タイムス』(一九五八年四月一日夕刊)も参考にした。
- (16) 以下の記述は『沖縄タイムス』(一九五八年二月一三日)の記事にもとづく。なお、都屋の歴史地誌に関しては読谷村字都屋字誌編集委員会編『都屋誌 字創設五十周年』(読谷村字都屋公民館、一九九八年)に詳しく、その内容をふまえた集落変容の検討は今後の課題としたい。

(加藤政洋 本学文学部教授)
 (前田一馬 京都橋大学経済学部専任講師)
 (河角直美 本学文学部教授)
 (常本亮太 本学文学部地理学専攻4回生)